

伊国いろは  
さんの話を  
しよう



著／秋山真琴  
絵／kaz。

高校生活に特別な感慨はなかった。

ほとんどの学生は、中等部からそのまま高等部に進学するのだ。机を並べるクラスメイトは、大半が昨日までと同じで、教壇に立つ先生も中学時代に見知った顔ばかりだ。中高一貫の私立三姉妹学園の高等部は、ぼくにとって魅力的でもなんでもなかった。

入学式を終えて講堂を出ると、校舎と校舎の間のスペースには、ところ狭しと長テーブルが持ち出され、先輩たちが部活動の勧誘活動に励んでいた。柔道服に身を包んでいる柔道部の先輩は、体格のいい男子を見つけてはその肩を叩き、フルートやヴァイオリンを演奏している先輩の脇では演奏会のチラシを配っている女子がいて、お茶やお菓子を配っている先輩たちもいた。

パッと見は、がんばっている勧誘活動そのものである。

しかし、彼らは、ぼくが中等部の二年生や一年生だった頃の先輩たちであり「ああ、三年前も、こんな感じだったなあ」と思うだけだ。

それでも、高等部から入学してくる先輩もいるだろうから、目新しい部活もあるかもしれない。十中八九、帰宅部に落ち着くことになるだろうけれど、そんなことを考えながら、ぼくは人波に乗るように、部活を端から端へと見ていくことにした。

伊国いろはさんの姿を見かけたのは、いい加減、飽きて帰ろうかと思っていたときだ。

いろはさんは、他の多くの部活が使っている長テーブルではなく、教室の机と、同じく教室の椅子を持ち出しており、勧誘活動に励むこともなく、静かにちょこんと座っていた。

机のうえには入部のための申込用紙があるだけで、なんの部活をやっているかも分からなかった。

近づいて見てみると、用紙の部活名欄には『ボ部』と書いてあった。

「ボ部……？」

「はい。いかがですか？」

用紙から目を離し、いろはさんの顔を見る。

実は、ぼくが人波を離れ、いろはさんの前に立ったことには意味があった。

ふわっふわのロングヘアーに、存在感のある大きな胸。引っ込み思案なのだろうか、大勢の学生がひしめくこの空間に居心地の悪さを覚えているように、キョロキョロさせている真ん丸の瞳。いろはさんを構成する要素のすべてが、ぼくの好みを完全に捉えていたのだった。

ぼくの直感の外れていなかった。

間近で見ると、いろはさんの美しさは際立っていた。

ちょっとタレ目がかかった大きな目に、ふっくらとした唇。髪の毛はふわふわしていて、撫でたら実に柔らかそうだった。それに、こちらを窺い見るような上目遣いや、ブラウスの隙間から微妙に見え隠れしている胸元も堪らない。

このアングル、まさか狙ってやっているのか？

そう思いながら、しかし、油断せずに質問する。

「あの。ボ部ってなにをする部活なんですか？」

「とっても楽しいんですよ」

そう言って、いろはさんは、にっこりと微笑んだ。

素敵な笑顔だった。

思わず微笑み返して、数秒ほど待つ。

「え、説明終わりですか？」

「はい、そうですけど」

「楽しいのは分かったんですけど、よければ具体的に、なにをする、どういう部活なのか、教えてもらえませんか？」

「わたしったら、ごめんなさい。インストは苦手なんです」

「インスト……？」

「はい。どこから説明しましょうか」

「じゃあ、部活動の目的から教えてください」

「それは……楽しむことです！」

いろはさんは両手を合わせると、きらきらとお星様が舞いそうな笑みを浮かべた。

うん、とても素敵だ。

「分かりました。部員は何名くらいいるんですか？」

「それが……」

突然、いろはさんは言いづらそうに目を伏せた。

「いまは、わたしだけなんです」

「えっ」

なるほど、きっと先輩が卒業して、ひとりしか残っていないのだろう。

そんなんで大丈夫か？　と思う一方、いま入部すれば、いろはさんを独占できることに気づき、思わず胸が熱くなる。

「部室はあるんですか？」

「はいっ、美術室の隣の隣、美術準備室の隣です」

「あー、あそこですか」

高等部の美術室は、まだ使ったことはないけれど、場所は知っている。廊下の突き当たり、美術準備室の隣に、さらに部屋があったことも、なんとなく覚えている。

「ってことは、文系の部活ですか？」

「そうですよ？」

いろはさんを顎に人差し指を当てながら、首を傾げた。

この子はなにを言っているのかしら？　みたいな戸惑いが見て取れるけれど、その科白は、主にぼくのものだ。

まあ、いいか。後のことは後で考えればいい。

「入部します。鉄島鉄人です、よろしくお願ひします」

「部長の伊国いろはです。よろしくね」

そう、ぼくは、このとき初めて、いろはさんの名前を知ったのだった。

「ところで、伊国先輩。ボ部の正式名称は、なんていうんですか？」

「ボードゲーム部ですよ」

ドミニオンとは、二〇〇八年にアメリカで販売されたカードゲームで、ドイツゲーム賞、ドイツ年間ゲーム大賞、アラカルト・カードゲーム賞を初め、様々なボードゲームの賞を総ナメにした、カタン以来の大ヒットであるらしい。

新入部員を迎え、どのゲームを最初に遊ぶべきか迷いに迷ったけれど、いきなりドミニオン、それも二人対戦で！ この英断が吉と出るか凶と出るかは、神のみぞ知る。

と、三十分ほど滔々と語ってから、いろはさんは、そう締めた。

「面白そうですね、早速、やってみましょう」

「そうね！」

いろはさんは、拳を握りしめると、テーブルのうえに三十分ほど放置されていた特大のゲーム箱の蓋を、厳かに持ち上げた。

ここからの話をする前に、少し状況を説明しよう。

ぼくと、いろはさんは、放課後のボ部の部室にいた。隣の部屋から美術部員たちの賑やかな声が聞こえてくるなか、ぼくらは狭い部室にひとつだけある大テーブルを挟んで向かい合っていた。

部屋を狭く感じるのには理由がある。四方が棚に囲まれており、古今東西の様々なボードゲームがギュウギュウ詰めになっているからだ。本来であれば、窓があるはずだが、ボードゲーム箱が色褪せるのを避けるため、黒いカーテンを引いているらしい。もっとも、そのカーテンもボードゲーム棚に遮られて見えないのだけれど。

結局、ボ部に入部した一年生は、ぼくだけで、それはつまり、この抱きしめたら柔らかそうな素敵な先輩を、ぼくは放課後になるたびに独占できることを意味した。

部室を訪れたぼくに、いろはさんは、買ってきたのだろうパックのコーヒー牛乳を奢ってくれ、自身はイチゴ牛乳を飲みながら、ドミニオンなるゲームの説明を始めたのだった。

ゲームのことになると熱が入るのだろう。

いろはさんは目を輝かせながら、拳を握りしめ、いかにボードゲームが面白いのか、そして、そのなかでもドミニオンがどれだけ面白いかを力説してくれた。正直、いろはさんの説明は下手だったけれど、彼女がいかにボードゲームを愛しているかは十二分に伝わってきて、ほんわか気分になった。

「面白そうですね、早速、やってみましょう」

いつまでもいろはさんの甘い声を聴いていたい。

そう思ったけれど、いろはさんとゲームに興じるのは、もっと楽しいではないか？ そんな予感を覚えたぼくは、説明が一段落したところで、振ってみた。すると、いろはさんは、いよいよ笑みを深くして「そうね！」と頷いて、ドミニオンの蓋を持ち上げたのだった。

ここで、ドミニオンというゲームについて、かんたんに説明しよう。

ドミニオンとはデッキ構築型と呼ばれるカードゲームで、手札を用いて場に出ているカードを購入して、それをデッキに加えて、自分のデッキを構築していくゲームだ。具体的には最初か

ら持っている財宝カードで、より上位の財宝カードや様々な効果を持つアクションカードを購入し、それらのカードを用い、勝利点カードを購入し、最終的に勝利点をもっとも稼いだプレイヤーが勝利する。

こう説明すればシンプルだが、実際にはアクションカードが十種類もあり、やや複雑である。

「早く、早く、鉄人くんの番よっ」

「ちょっと待ってください、伊国先輩」

慣れているのか、さくさくとターンを終えるいろはさんに対して、ぼくはズブの素人だ。

面倒なので、持っているカードをすべて開示し、このターンに使える財宝の合計値を、テーブル上に置かれているカードと見比べる。

「4金1Buyだから、鉄人くんが買えるのは、ここからここまでね」

待ち切れなくなったのだろう、ぼくの手札を見た、いろはさんが助言してくれる。さらに、「わたしだったら、あれかなあ。でも、早めに切れそうな、あれを先に確保するのも手だし、圧縮するなら、あれを選んでもいいし、うーん、どうしようかしら」

感情移入しているのだろうか、いろはさんは自分のことのように、テーブル上へ視線を走らせている。

その際に、ぼくは、当然のように、いろはさんの俯いた顔を眺める。カードに投げかけている眼差しは真剣そのもので、普段の小動物的だったり、おっとりしている雰囲気も悪くないけれど、好戦的に輝いているのも素晴らしい。

「……ちょっと、鉄人くんっ！ なにを、ぼーっとしてるの？ 早く選んで！」

「あ、すみません。じゃあ、これにします」

いかんいかん。

見惚れてましたと正直に言うわけにもいかず、いちばん身近にあったカードを手にとって、ぼくはターンの終了の宣言した。

「み、民兵……ッ！ いきなり、そこへ行くとは、鉄人くん、攻撃的ね。でも、わたしは堀は買わないわよ。初プレイの鉄人くん相手に、堀は絶対に買わないって、わたし、昨日の夜から決めてたんだから！」

昨日の夜から決めていたとか……。

いろはさん、どんだけゲーム好きなんだ。

しかし、そのプレイ相手が、他ならぬぼくであることを思うと、いろはさんのゲームへの一途さは、素直に心地良い。

そんなことを思いながら、手元に引き寄せたカードを間近で眺める。

民兵のカード。

アクションカードのひとつで、どうやら他のプレイヤーの手札を減らすことができるアタックカードと呼ばれるものらしい。さらに、他のカードを眺めると、堀と書かれたカードがあった。堀のカードの効果は、他プレイヤーが出したアタックカードを無効化できるらしい。

なるほど。

面白そうだ。

その後、手探りでプレイしつづけている内に、手元に民兵のカードがやってきたので、試しに場に出してみた。

「はい、ぼくのターンですね。民兵のカードを使います」

「ひゃう！」

突然、いろはさんが変な声をあげた。

「え、どうかしましたか？」

「ななななな、なんでもないのよ！ 慌ててなんて、いないんだからねっ！」

分かりやすく動揺しながら、いろはさんは、あーでもないこーでもない呟き始めた。

「えーっと、村を二枚出してから、鉱山で銀貨を金貨にしつつ、引いた二枚のどちらかを改築しようと思っていたのに、二枚も手札を減らさないといけないなんて。村、鉱山、銀貨を残しておくべきかしら、それとも改築、それともそれとも敢えて鉱山と銀貨？ ああ、山札に残ってるカードが分かればいいのに。どうしたらいいのかしら」

見事なまでに、思考がダダ漏れである。

あわあわ言いながら捨てる手札に指を掛けたり、かと思うとパッと離したり、唐突に山札をジーンと睨んだり。

「山札をこっそり見るのはルール違反だと思いますよ、伊国先輩」

「分かってるわよっ！！」

口を挟んでみたら、涙目で睨まれた。

……って、えっ！ 泣いてる！？

真剣に悔しがっているのだろうか、いろはさんは「ううう」と唸りながら、手札越しにぼくを睨んでいる。

や、やりづらいなあ。

「えっと、それじゃあ、先に進めてますよ。銅貨が三枚あるので、民兵の仮想金2金と合わせて5金で市場を購入します。はい、伊国先輩の番ですよ」

「分かったわよ。じゃあ、わたしは、これとこれを捨てるからね！」

「は、はあ……」

「はい、村でワンドロー、もう一枚、村でワンドロー。……あっ！」

村というのは、アクションカードをプレイできる回数を増やししながら、山札から追加で一枚ドローできる、使い勝手の良いカードだ。村のカードを二連続でプレイし、欲しかったカードが引けたのだろうか、先ほどまで目をウルウルさせていたいろはさんは、すっかり回復したのか、満面の笑みだった。回復が早いなあ。

「ふふん、鉄人くん。これが上級者の戦い方よ！ 鍛冶屋で三枚ドロー！ えいっ、えいっ、えいっ、よし！ 市場でワンドロー、鉱山で銀貨を金貨に変えて、もう一枚、鉱山で銀貨を金貨に変えて、はいっ、全部で7金2Buyよ！！」

ふふんと鼻息を荒くして、豊満な胸を張り、こちらを見つめるいろはさんは、完全なるドヤ顔だ。

漫画だったらドヤァァと効果音が足されたとしてもおかしくない。

「さすが伊国先輩ですね。7金もあれば、なんでも買えるじゃないですか」

「そうよ！ わたしに買えないものはないのよ！」

8金の属州は買えませんよと指摘しようと思ったが、止めておくことにした。その代わり、静かに、いろはさんの仕草を見守る。

使えるお金が多く、また購入権もふたつあることから、迷いが生じているのだろう。

恐らく、いま、いろはさん、すなおに6金の金貨を買うか、それとも、7金を2金と5金ないし、3金と4金に分割し、二枚のカードを一気買いするかで迷っているのであろう。初心者のぼくでも、思考が読み取れてしまうくらい、いろはさんは、分かりやすかった。

ぼくが、そんなようなことを、のほほんと考えている間も、いろはさんは、下唇を噛み、両手を握りしめ、そろそろ、その視線力でカードが燃え始めるんじゃないかってくらいテーブル上を凝視している。

ふと、いろはさんが、なにを見ているか分かった。

堀だ。

ぼくの持っている民兵の攻撃を防ぎ、彼女が買わないと昨日の晩に決めたらしい、堀のカードを。いま、いろはさんは凝視していた。

ちょっとした悪戯心が芽生えた。

この、外見は大人びているけれど、大好きなゲームのこととなると子供らしさを発揮する、素敵で可愛い先輩を、ちょっとからかってみたいという。小学生が好きな子に、ちょっかいを出すような、悪戯心が。

「買ってもいいんですよ」

ぼくは言った。

いろはさんは、ハッと我に返ったように顔をあげ、ぼくに視線を向ける。

穏やかなぼくの目線と、勝ちにいきたい、と思ういろはさんの激しい目線が交錯し、火花を散らす。そのまま、いろはさんは、ぼくと目を合わせたまま、その表情を多様に变化させた。生意気な先輩にギャフンと言わせてやろうというお姉さんのような顔になったかと思えば、わたしたたら、ついマジになっちゃって、とでも言うかのように眉根をひそめたり、自分の心が揺れ動いていることに気づいて戸惑って口がアヒル口になったり。

最後のアヒル口が予想外に可愛らしさ炸裂で、心臓が破裂するのではないかと思ったけれど、最終的に、いろはさんは、キッと瞳を光らせると、堀と市場のカードを手に取り、力強く「エンド！」とターンの終了を宣言した。

このターンで吹っ切れたのか、いろはさんは、次のターンから、どんどん堀カードを購入し、守りを固めていった。デッキ内に堀のカードが増えれば、それが手札に回ってくる確率も高まり、

「ぼくのターンですね。はい、民兵です」

「えへへ～、堀ガードだよーん」

とニヤケ顔で、堀と書かれた青いカードを、ぼくの方に向けるのだった。

攻撃を阻まれて、ぼくは不愉快だっただろうか。



いいや、そんなことはない。

いろはさんの、ほわんとした花咲く笑顔は百点満点で、もう幸せの絶頂だった。むしろ、その笑顔を見るために、手札に堀のカードが回っていますようにと祈りながら、積極的に民兵のカードを出していった。

しかし、どんなに楽しい時間も、やがては終わりが来るというもの。

デッキの構築が進み、手札が充実し始めたタイミングで、ぼくらは勝利点カードを狙いにいった。属州を買い、属州が買えないときは公領を買い、公領が買えないときは屋敷を買い。やがて、属州のカードが売り切れ、そして、

「ゲーム終了ね。それじゃあ、勝利点の計算をしましょう」

いろはさんが厳かにゲームの終了を告げ、ぼくらは黙々とデッキから、緑色の勝利点カードだけを取り出し、それらの点数を合計した。

「36点です」

「えっ……わたし、27点。ま、負けた……」

「あれ、ぼく勝てたんですか??」

意外だ。

慣れてないし、当然、いろはさん勝利で終わると思っていたのに。

どうして勝てたのだろうか。

素朴な疑問が口を突いて出そうになったけれど、ぼくは慌てて口元を引き締めた。それは、きっと、敗者が最も憤る発言だと思ったからだ。しかし、いろはさんは、既に十分に荒ぶっていて、

「悔しい悔しい悔しい！ もう一回！！」

と、持っていたカードをテーブルに放り出すと、両手を握りしめ、ふわっふわのロングヘアが乱れるのも気にせず、激しく首を振った。

「もう一回！ もう一回やろ！ 鉄人くん！！」

バンと両手でテーブルを叩き、こちらに身を乗り出してきた、いろはさんの迫力に圧され、ぼくは「は、はい」と言うしかなかった。

目の前、テーブルのう上に突いた、いろはさんの両腕の間で、大きな胸は柔らかそうにたわみ、プリンのように揺れていた。

本日の戦績：三戦三勝。

カルカソヌとは二〇〇〇年にドイツで販売されたボードゲームで、ドイツゲーム大賞とドイツ年間ゲーム大賞を獲得した名作ゲームだ。

ボードゲームと言っても、ゲーム開始時点では点数をカウントするボードだけしかなく、プレイヤーは中身の見えない布袋からタイルを引いていって、それをテーブル上に配置してボードを完成させてゆく。と言ってもボードを完成させるのが目的なのではなく、自分の手下を置いた都市や道路を完成させることで得点を獲得していくのだ。

いろはさんの話では、四人まで遊べるらしいが、二人対戦の場合、また違った面白さがあるそうだ。

「昔、水道管ゲームというのをやったことがありますけれど、あれと似てますね」

「懐かしいわね。日本では、あれとUNOが有名かしらね」

「ああ、定番ですね、UNO。ああいうのは、この部室には、ないんですか？」

「あることにはあるのだけれど……」

いろはさんは、椅子に座ったまま振り返ると、部室の四方を囲んでいるボードゲーム棚を、順々に見渡した。

「どこかにはあると思うわ」

「埋もれてしまったんですね……」

と、言いながらゲームスタート。

じゃんけんでスタートプレイヤーを決めると、あっさり勝ってしまった。布袋からタイルを引いて、最初から置かれているタイルの隣に、矛盾が生じないように置く。

「あら、手下コマは置かないの？」

「忘れてました」

前述の通り、このゲームの目的は、ボードを完成させることではない。

タイルを置いたタイミングで、手元にある手下コマと呼ばれるコマを、タイル上に置くことができ、コマの置かれた都市が城壁で囲まれて完成したり、道路の両端が確定して、ようやく得点になるのだ。

「じゃあ、ここに置きます」

そう言いながら都市の絵のうえに手下コマを置く。

「鉄人くんは都市で大量得点を狙うわけね。それじゃあ、私のターン。……あら、このタイル、使い勝手が悪いわねえ……」

一枚目からウンウン唸り始める、いろはさん。

どんなタイルを引いたのだろうと覗き込んでみると、なるほど、確かに使い勝手が悪そうだ。

下手に置けば、ぼくの都市を完成に近づけさせてしまう。

「いいわ、ここにしましょう」

散々、迷った挙句、いろはさんはタイルを離れたところに置いて、道路のうえに手下コマを置いた。

「ぼくのターンですね」

布袋に手を伸ばす。

「四人まで遊べるゲームだと言ったでしょう」

「え、はい。そう、仰ってましたね」

「このゲーム、もう分かってると思うけれど、ドミノオンと比べると、ずっとシンプルなのよ」

「そうですね。ターンが来たらタイルを引いて、それを何処かに置く。やることはそれだけです  
からね」

「初心者でも、気軽にプレイできて、家族で楽しむのにもうってつけ、カルカソンの名作や定  
番と呼ばれるのは、そんなところが関係していると思うの」

「そうですね。確かに、正月とかに、家族とプレイするのもいいですね」

そんなことを言いながら、しかし、ぼくの目は、いろはさんの、テーブルのうえで組まれた腕  
、そのうえに置かれているワガママな胸に釘付けだった。大きいひとは肩がこると言うけれど、  
いろはさんの肩もこっているのだろうか。

肩がこる……か。

こりを解消するための手段として、肩を揉む。

というのは、ぼくと、いろはさんの距離を近づけるファーストステップとして、けして悪くな  
いアイデアのように思われた。

問題は。

いかにして、それを言い出すかだ。

うん。

決めた。

即座に実行に移す。

「伊国先輩」

「なあに、鉄人くん。ヒントなら教えてあげないわよ」

「このゲーム。敗者が勝者の肩を揉むという罰ゲームは、どうでしょう？」

真意を悟られぬよう、敢えて淡々と試みる。

いろはさんは大きく目を見開き、ぼくのアイデアに驚きを隠せない様子だ。しかし、乾いたス  
ポンジが水を吸い込むように、時間を経るごとに、理解が広がっていったのか、その口元には、  
やがて「ニヤリ」としか表現の仕様がな、邪悪な（でも可愛らしい）笑みが浮かべられた。

「ふふん、いいわよ。鉄人くん、その勝負乗ったわ」

よし！

勝った！

内心で喝采を挙げながら、ぼくも、いろはさんに負けじとニヤリと微笑んでみせる。

「負けませんからね」

「その科白は、わたしのものよ。それに、鉄人くん。早計だったわね」

「え？」

「さっきの私の話、続きがあるのよ」

「このゲームが、家族で楽しむのにうってつけてことですか？」

「そう。最初に言ったでしょう、ふたりで対戦する場合には、また違った面白味があるって」  
.....ああ、言われてみれば、そんな前口上があったような。

しかし、意味が分からない。

何人でプレイしようが、同じゲームであることにはかわりない。

「どういうことですか？」

「かんたんよ。この布袋のなかに残っているタイル」

そう言いながら、いろはさんはタイルが詰まった布袋を左右に振った。勢いをつけて振ったので、たわわに実った果実のような両胸も、ぷるんと震えて目のやり場を困らせる。

「わたしには分かっているのよ」

「.....その袋、貸してください」

いろはさんから布袋を貰い受け、頭上にかざしてみる。

蛍光灯の明かりのした、中身が透けて見えるのかと思ったけれど、そういうわけではないようだ。袋の表面に顔を近づけてみるけれど、作りはしっかりしていて、中身が透けて見えることはない。試しに手をつ突っ込んでみたけれど、外から、いま、自分が手にしているタイルの模様を窺い知ることはできない。

「お返しします」

「検証は充分かしら？」

「はい。袋のなかのタイルが分かるって、どういう意味ですか？」

「正確には『残っているタイルが分かる』ね」

「.....ああ」

なるほど、分かった。

当たり前だけれど、タイルの模様は決まっているのだ。

都市の絵柄が描かれていたり、道路が伸びていたり、そのタイルは有限で、例えば、タイルの模様をすべて暗記しているプレイヤーがいれば、布袋からタイルを引き抜く前に、果たして自分が欲しいタイルが袋のなかに残っているのかどうか、残っているとしたら、どの程度の確率で、それを引くことができるのか、それが分かるということだ。

「分かりました。伊国先輩は、タイルのすべてを暗記しているんですね」

「ふふっ。ここでイエスと答えられたら格好いいのだけれど、覚えているのは三分の一くらいね」

「はあ、三分の一ですか。それでも充分、すごいですね」

ちなみに、ここで唐突に、隠し設定を明かすけれど、実は、ぼくは、見たものをけして忘れないサヴァンだ。

ゲーム開始前、いろはさんはテーブルのうえにタイルを全て並べてみせた。半分はひっくり返っていたけれど、逆に言えば表を向いていた半分は見知っている。

「つまり、二人対戦の場合、残タイルを知っている方が有利、伊国先輩は、そう仰りたいわけですね」

「その通りよ！」

いろはさんは威勢よくピースサインを突き出すと、それから布袋からタイルを出し「あー、そろそろ、これが来るんじゃないかって思ったのよねー」と、迷いなくテーブルの一角に置いた。

そのタイルを以て、いろはさんが伸ばしに伸ばしていた道路が、ついに完成した。

いろはさんはニヤニヤしながら、ボード上に配置していた手下コマを回収すると同時に、得点ボードの自分のコマを進めた。

その一連の様子を見ながら、脳内で審議を重ねる。

議題は、ただひとつ。

果たして、いろはさんは、ほんとうに三分の一のタイルを記憶しているのかどうか、だ。

昨日のドミノオンの惨敗っぷりを鑑みるに、いろはさんはボードゲームを愛しているけれど、勝利の女神が、いろはさんを愛しているかどうかは議論の余地がある。

全タイルの三分の一を記憶していると豪語するいろはさんと、半分を記憶してしまったぼくが正面衝突した場合、果たしてどちらが勝利するのか。いや、自明ではないか。三分の一と半分が激突すれば、半分が勝利するのは目に見えている。

しかし、それではダメだ。

試合に勝って、勝負に負けるようなものだ。

ぼくの最終目的は、都市でも、道路でもなく、あくまで、いろはさんの肩！

あの白く、細長い首から繋がっていて、ぼくの目を奪ってやまない魅力的な双丘へと通じる、優雅で、品よく湾曲している、いろはさんの肩！

絶対に手に入れなければならない……。

いろはさんとボードゲームを楽しみ、ぼくが勝利し、いろはさんの悔しがる顔を見るのは確かに快感だ。

けれど、今回に限って、話は別だ。

ぼくは是が非でも、このカルカソンヌ戦に負けて、いろはさんの肩を揉まなくてはならないのだ！

そのためには……ッッ！

「て、鉄人くん、なんか怖いよ……？」

絶対にこの戦い。

負けなくてはならない！！

いろはさんからタイルの詰まった布袋を奪い、タイルを引く。

「これは……」

見覚えのあるタイルだ。

草原を一本の道が貫いている。全タイルのなかでも、比較的、数の多い種類。これを、ぼくは、いろはさん視点で不自然でない程度に、ぼく自身にとって有利だけれど、最終的に、いろはさんを勝たせる場所に置かなくてはならないのだ。

どこだ？

ぼくは、このタイルをどこに置けばいい……ッ！？

血走る目でテーブル上をスキャンし、最適解を算出する。

それは、

「ここだっ！」

ついに見つけたポイントに、ぼくはタイルを叩きつけるようにして配置する。

その途端、

「あーあ」

至極残念そうに、いろはさんが溜め息を吐いた。

「……なんですか？」

「いや、残念だなあ、と」

「なにがですか？」

「いや、ほらほら。ここだよ、鉄人くん。そのタイルは最後の一枚だから、ここに置いておかないといけなかったんだよ。いやー、失敗しちゃったねー」

いろはさん。

分かっていますよ。

もちろん、そこに置くのが正解です。でも、ぼくは、敢えて、そこに置いたのです……ッ！  
……という内心の目論見を、おくびにも出さず、

「そうだったんですが、それは、やられましたね」

と、さも、悔しそうに腕を組んでみせる。

「ふふん、してやったんだよ」

得意げにタイルを引き、意気揚々とボード上に置く、いろはさん。

ぷはーと鼻から息を吐きながら、腕を組んで、胸を張る姿は、凜々しくも色気があって、つい見惚れてしまう。

だがしかし。

ぼくが、いろはさんに惹かれている素振りを見せるわけにはいかない。万が一にでも、それが見抜かれてしまえば、ぼくは、いろはさんの肩に触れる（それどころか揉みしだく）権利を、永遠に失ってしまうのだから！

なればこそ……ッ！

「行きます！」

気合を入れて布袋に手を突っ込み、力強くタイルを引き抜く。

ぼくが引いたのは、それは……！

「ああっ！」

叫び声をあげたのは、いろはさんだ。

ぼくの手元を覗き込んだ彼女は瞬時に悟ってしまったのだ、いま、ぼくの手の中にあるタイルこそが、本来、ぼくが待ち望むべき、ぼくに高得点をもたらしてくれる奇跡の如きタイルであると。

冷や汗が垂れる。

これは。

さすがに。

誤魔化しきれない。

そのタイルは、ぼくが築きあげようとしていた広大な都市を完成させると同時に、いろはさんが伸ばしていた遠大な道路を完成させるものでもあった。ぼくが記憶している限り、このタイルは、残念ながら、この一枚だけだ。いろはさんの悲壮に満ちた表情を盗み見る限り、いろはさんの三分の一の記憶を加えても、もう、布袋のなかには、彼女の道路を完成させるタイルがないのであろう。

その事実を十分に理解しながら、ぼくはタイルを、自分のために置かざるを得なかった。そうしなければ、不自然だからだ。

仮に、ぼくが自分の利を度外視して、いろはさんの道路を完成させてしまえば、彼女は短期的には喜ぶかもしれないが、その後、ぼくの策略を見抜いてしまうだろう。

さようなら、いろはさんの肩。

この終盤で点差をつけてしまったら、もう、いろはさんは挽回できないだろう。

この一撃は、さよならの一撃だ。

いろはさんの勝利に別れを告げ、ぼくの勝利にも別れを告げる、告別の一撃だ。

だが。

放たざるをえない。

なあに、また罰ゲームを提案すればいいだけの話だ。

まだボ部の活動は続くのだから。いろはさんの肩を思う存分に揉みほぐす機会は、明日以降にも待っているはずさ。

「鉄人くん……」

耳元でいろはさんの声が響く。

いつの間にか、いろはさんが席を立ち、すぐ傍に立っていた。

「なんですか」

いろはさんの問いに答えたぼくの声は掠れていた。

あれ、どうしたことだ、これは……？

「鉄人くん、なんで泣いてるの？」

「あ、あはっ。なんで、でしょう……ね」

いろはさんの肩揉みを逃したことは、ぼくに深い衝撃をもたらしていた。自分でも気づかぬうちに、ぼくは涙していた。

「悲しいことでもあったの」

そう言って、突然（それとも、必然、だろうか）いろはさんは座ったままのぼくを抱きしめた。

前を向いていたぼくの視界が半分ほど翳る。

え！？

これは……！！？？？

ありえない、絶対にありえないことだった。

なにを思ったのか、いろはさんは、涙を流すぼくを抱きしめることにしたようだ。ぼくの右の耳が、ふにやりとしたなにかに押し潰される。

「ねえ、鉄人くん」

左の耳に、いろはさんの息が吹きかかる。

ぼくの頭を抱え込むように、いろはさんの顔は、向かって左側にまで来ていた。胸の押し付けが強くなる。しかし、けっして重みは強くなっていない。ぼくの右耳や、側頭部に圧され、いろはさんの胸は、柔らかく潰されているのが分かる。いや、かすかに硬い。この硬さは……まさか、ブラジャーの硬さだろうか。乾いたブラウスの向こうに、ブラジャーの硬さがあり、そのさらに先、秘めやかに狂おしい、無限の柔らかさを内包した、ふにやりとしたおっぱいを感じられた。昔、同級生が生乳は、水風船みたいな感触というようなことを言っていたけれど、なるほど実体を持ちつつ、不定形に、その形状を魅力的に変化させる。それは、理性をとろけさせる、とても身体の一部とは思えない、魅惑の塊だった。

「ねえ、鉄人くんったらあ」

「は、はい」

天使の囁きか、それとも悪魔の誘いか。

ぼくは、いろはさんの声を待つ。

「そのタイル、どこに置くのかなあ……って」

「え？」

半分ほど塞がった視界のなか、ぼくの手は、まだタイルを持ちつづけていた。ぼくに勝利をもたらし、いろはさんに敗北を与える、必殺のタイルを。

「伊国先輩」

「なあに？」

「罰ゲーム、覚えてますよね」

いろはさんに抱き締められたまま、ぼくはタイルをテーブルのある一点に置いた。

もしかしたら。

肩を揉まれるのも良いかもしれない。

そう思いながら。

本日の戦績：一戦一勝。



高円寺駅改札前。

ある土曜日の昼下がり、ぼくは慣れない電車を乗り継いで、高円寺というオサレスポットに来ていた。

昔から、このあたりは、どうにも鬼門なのだ。

中野、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、吉祥寺、三鷹。

このあたりには自称アーティストなひとたちが、仲良く暮らしているような気がして、ぼくのようなコミュニティに入れたいタイプの人間は、いまひとつ敬遠してしまうのだ。

そんなオサレスポットの真っ只中である高円寺に足を踏み入れたのは他にもない、いろはさんが、待ち合わせ場所に指定したからだ。

「ねえ、鉄人くん。今度の土曜日、暇だったりするかな？」

「用事らしきものは特にありませんけれど」

「良かった。わたし、ちょっと行きたいお店があるんだよね」

「はあ。ボードゲームのお店ですか？」

「な、なんで分かったの！」

いろはさんが目を輝かせているときは、ボードゲームのことについて喋っているからですよ。

と、素直に答えそうになったけれど、寸前で飲み込み、代わりに、こう言った。

「伊国先輩は気づいてないかもしれませんが、ぼく、けっこう伊国先輩のこと見てるんですよ。伊国先輩の考えていることくらい、分かります」

「そうだったんだ！ 持つべきものは優秀な後輩だねっ！」

ふむ。

科白の中盤で恥ずかしさのあまり顔から火を吹くのではと危惧したけれど、いろはさんには、これっぽっちも伝わってないようだ。まあ、いいか。

——とまれ、そんな事情で、学校のない土曜日。

ぼくはコムサイズムで買った白と黒のツートンカラーに身を包み、高円寺駅の改札前に佇んでいた。

普段は、あまり出歩かないからファッションには自信がない。

通りがかりのひとが「なあに、あの子、ダサいわねー」と見ているのではないかという不安が脳裏をよぎるが、自意識過剰だと振り払う。逆に周囲を見回してみると、自分なんか霞んで見えなくなるほど奇抜なファッションが多いことに気がついた。

ハリーマニアの世界観からやってきたのかと目を疑うようなコートを着ている幼い少女や、一目でコスプレと分かる、ペラいセーラー服に身を包んだ男性や、和服のカップル。もちろん、全員が全員、目を引く格好をしているわけではないが、その頻度は「さすが高円寺」と思うほどに多いように思えて仕方ない。

そうってくるのは、心配なのは、いろはさんの私服だ。

果たして、いろはさんは、どのような格好で現れるのだろうか。

たとえばゴスロリ。

可愛いものが好きな、いろはさんのことだ。頹廢的で破滅的なゴシックさは分からないが、白やピンクで統一した、いわゆる白ロリや甘ロリを見にまとめて現れる可能性は高い。肌も白いし、ふわふわのさらさらのロングヘアーは、さぞ似合うことだろう。ロリーなファッションと、発育のいい胸元のギャップも見物だろう。

白ロリや甘ロリがありなら、メイド服もありかもしれない。部室では主にイチゴ牛乳を飲んでいる、いろはさんだが、紅茶が趣味で、自宅では、よく淹れていると言うし。「お待たせ致しました、ご主人様。今日はアールグレイでございます」なんて、どうだろうか。まあ、紅茶の種類なんて、アールグレイしか知らないわけだけれど。

あるいは普段の落ち着いた雰囲気から、掛け離れたファッションという可能性もある。パンクだったり、ダメージ系だったり、ビジュアル系だったり。いや、そう言えば、好きな音楽は下北沢系のロックであるという、重大なカミングアウトがなされたではないか。ということは、シンプルにTシャツにジーンズだろうか？

はたまた意表を突いて制服！ 休日に後輩の男子と出掛けるのに、なにを着ようか何時間も迷った挙句に、普段のブレザーに袖を通してしまう。その可能性も、ボードゲームのとき以外は引込み思案で、臆病な、いろはさんなら考えられなくはない。

もしくは――。

「ちょっと、鉄人くん！ なにを、ポーっとしているの!？」

「……え、あれ？」

「あれじゃないわよ、わたしです、伊国いろはです！」

妄想のあまり、現実世界から意識が遠ざかっていたようだ。

いつの間にか目の前に立っていた、いろはさんに視線を向ける。

「伊国先輩……」

「なあに？ 言っとくけど、服装のばかにしたら怒るからね」

「いえ、その」

「なによ、はっきり言いなさいよ。いえ、言わなくていいわ。こんなところに、いつまでも立っていたら変なひとでしょう。早く行きましょう、ね」

そう言って、いろはさんは、斜めに被った帽子の隙間からジロリと睨みつけてくると、ぼくの袖を引っ張るようにして歩きはじめた。

つられて歩きはじめながら、もう少し、いろはさんを見ていたかったなと思う。上は、コットンだろうか、ふわふわの生地のブラウスを重ね着していて、下は、鮮やかな花柄のショートパンツ、足元は茶革のサンダル。それにちょっとお化粧品をしていた。

なるほど、お嬢様の私服らしい、清楚で落ち着いていて、でも明るく華やかで、大好きなボードゲームのことになると夢中で、盛り上がると、つい拳を握ってしまう。そんな、いろはさんにぴったりの格好だった。

「似合いますよ」

早歩きで追いつき、ぼくにしてみれば勇気を出して言ってみただけれど、いろはさんは、恥ずかしい

のか、特に反応を返してくれなかった。

まあ、慌てる必要はない。

落ち着きを取り戻したぼくは、そっと息を吐いた。

どうせ、ボードゲームショップにつけば、いろはさんは、きっと、子どものようにはしゃぎ、ぼくは、その様子を思う存分、堪能できるのだから。

本日の戦績：不戦勝。

## 伊国いろはさんの話をしよう

<http://p.booklog.jp/book/39073>

著者：秋山真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/unjyoukairou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39073>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39073>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.